

Alert 反天皇制運動 47号

[通巻 429 号]
2020 年
5 月 5 日発行

第 47 期・反天皇制運動連絡会

ネット演劇というものがあるらしい。それはやはり、今のファシズム権力による「非常事態宣言」によって使用禁止になった劇場や、地域自警団による不要不急摘発によって公演中止に追い込まれた演劇人たちが、緊急避難的にインターネット上に表現の場を求めたもの、らしい。これは新しいメディアに身を転じ、自ら回転して時代をなぎ倒していく！、というよりは、どうも劇場封鎖が解かれたときに「また、よろしくね」と言ってる様子で、まるで迫力に欠ける、ようだ。

ちなみにニッポン劇団協議会とニッポン演出家協会、ニッポン劇作家協会の革新的文化団体が音頭をとって、ファッショ政府、小ファッショ自治体、大資本企業に対して「自粛休業」保障の支援要請を申し出た、という。これは普段なら、「自立した表現者が？ すごいね」と呆れてムシする愚行だけど、なんせ非常事態宣言下だ、考え得るあらゆる手段の、遊撃的手法のひとつとして繰り出されたものかもしれない。こういう時に批判はいかん。一緒に団結しなくては、な。

その要望文の中に「〈演劇の死〉は、現代ではなにより貴重で大切な〈対話の死〉〈想像力の死〉とも言えるのです。」と泣けるセリフもある。これはもちろん「演劇」に限らず、不要で不急でしかない、人間の行為の復権のコトバである。それと同じようなセリフを、2011 年 3 月 11 日以降に、ぼくたちは何度も聞いた。……「(無力の) わたしたちに、なにができるか」と。

そう、ぼくたちは「無観客演劇」をやろう。ネットを道具に使ったり、対話からいちばん遠い権力からお金を貰ったりするのではなく、「無念の死」を死んだ者たちを目の前に置いたつもりで。現下の、都会の路上で殺された者、先進国の都市が封鎖が解かれた後に、続々と情報だけが伝えられる死者たちの言葉を聞きながら。それが、過去を含む現在ただいまを生き、現在を含む未来という歴史を観客とする、リアリティある演劇の流れだと思うんだ、けど。(池内文平)

今月の Alert ● コロナ禍状況のなかで反天皇制の活動を確保しつつけよう — * 2

反天ジャーナル ● — なかもりけいこ、はじき豆、北 * 3

状況批評 ● 〈グリーンウオッシング〉としてのオリンピック・パラリンピックと天皇制
— コロナウィルス状況から見えてきたもの — 鵜飼哲 * 4

書評 ● — 私的読解報告 徐翠珍著『華僑二世徐翠珍在日 その抵抗の軌跡から見える日本の姿』
— 大友深雪 * 6

太田昌国のみたび夢は夜ひらく (119)

● コロナ禍を通して見る自国中心主義と国際主義 — 太田昌国 * 7

マスコミしかけの天皇制 (46) 〈壊憲天皇制・象徴天皇教国家〉批判 その 11 ●

「原子力非常事態宣言」・「緊急事態宣言」下の「立皇嗣の礼」延期 — 天野恵一 * 8

野次馬日誌 * 9 集会の真相 * 11 反天日誌 * 12 集会情報 * 12



250 円

● 定期購読をお願いします (送料共年間 4000 円)

● 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://www.ten-no.net/> mail: hanten@ten-no.net

● 以前の情報はこちら ▶ <http://hanten-2.blogspot.jp/>

今月の

Alert

コロナ禍状況のなかで 反天皇制の活動を確保しつつけよう



昨年、徳仁即位からまる一年、昨秋の即位礼・大嘗祭からも半年が経過した。予定されていた即位関連の儀式からすると、四月一九日の立皇嗣の礼と饗宴、皇祖とされる神社への秋篠による「奉告」などを経て、一連のスケジュールは終えていたはずだ。しかし、新型コロナウイルスの症状とするウィルスCOVID-19のパンデミックにより、立皇嗣の礼はついに時期を明記しないままの延期となり、当分は宙吊りとなっている。

昨年、元号の制定のうちに、日本文学研究者の品田悦一氏が、この「令和」は、万葉集で大伴旅人が王羲之の「蘭亭集序」を参照して撰んだ「梅花歌」からとったとされているが、これに隠された大伴旅人の意図は、じつは、皇位継承と光明立后にまつわる争乱であり「冤罪」とされている「長屋王の変」を想起させるためのものだと思ひ解いてみせ、古典理解の奥深さを知らされたものだ。偶然とはいえ、今後は男系女系はじめさまざまな展開が想定される天皇制の、ひとつの要となるはずの秋篠の立皇嗣礼が難航していることを思うと、微笑を催さずにはられない。

さて、全国植樹祭は来年に延期、春の園遊会も中止となった。皇族の出席予定の行事はいずれも中止や延期、年内に予定されていた外国訪問についても困難な状況だ。五月二日現在で、日本からの渡航者や日本人に対して入国制限措置を取っている国や地域は一八四か国・地域で、さらに入国後に行動制限措置がなされるのは、そのうち六四か国・地域である。政府や外交な

どの関係者に特例がありえないわけではないだろうが、その地位に「神聖性」があるとなかろうと、いまさら「神の子」というわけにもいかない天皇や皇族たちとて、これは否定できない。五月一日には新規の「天皇メッセージ」があるかもしれないとの観測もなされていたが、これも発することはできなかった。



現在進行形の感染症疫病の動静は、なおきわめて深刻だ。それにもかかわらず、病原体が蔓延している事実は明らかなのに、「専門家」からのメッセージは意図的だと思えないほどに不明瞭で、統計数値の発表も、感染状況、発病の状況、地域などいくつもの要素がまたに截断としていない。本来はこれらに基づいているはずの公衆衛生にかかわる機関からの「対策」は、医療現場をバックアップするための制度的経済的保障を提示するものではなく、むしろ、現場の主体性を縛り、情報の操作と恣意的な統制を強く疑わせるものとなっている。これに加え、政治状況がさらに混乱をきたしているため解決のめどは立たず、「瀬戸際」や「重要な時期」と冠つけられた二週間と同様に「緊急事態」の一月もまた、今後、どれほど延長されるかが全く不明だ。

さらに、事態に乗じて政治家や極右活動家がヘイトをふりまき、不安を駆り立て、「自粛警察」と揶揄されるほどの「相互監視」と「相互摘発」

状況をつくりだしている。社会的インフラを支えるエッセンシャルワークに対して、口先だけで経済的支援などの実質のない「感謝」発言が飛び交うその片方で、病菌の蔓延と職業差別や民族差別、性的差別が結び付けられている。

私たちは、こうした状況に、今後もしっかりとNO!の声をあげていかなければならないと考えている。感染症が社会や個人にもたらす断絶の重さと、これの防止の重要性を前提としながら、そのためには、基本的な人権こそが重要な観点であり判断基準であることを、あくまでも強調しなければならないと考えている。

そうした活動に対しても、「不要不急な活動ではないか」という声がありえないわけではないことは、もちろん意識させられている。しかし、感染したひとが、感染したことをもって、事後的に、あたかも政府に従わないならざるものである、あつたかのごとき、社会的裁断を下される社会では、「病」は隠蔽されざるを得ない。だからこそ「三密」ならぬ権力の密議や密約をも問題とし、惨禍や寡奪を阻止しなければならないのだ。

私たちの周囲では、会議や集会の方法を含めて、明らかにこれまでと違う活動形態を目指す模索も開始されている。こうした方向をエンパワースする試みに、反天皇制運動の側からも加わっていきたいと思う。

(蝙蝠)

緊急事態宣言下のものもろ

緊急事態宣言がコロナ対策の「魔法の杖ではない（小笠原みどりさん言）」ことを実感する日々を送っている。外出自粛・休業要請とは名ばかりで私権を制限された事実上の戒厳令下になっている。要請は「命」と対比させた強制となり、それに反するものを取り締まるのはお上だけでなく市民による「自粛ポリス」が力を奮っている。まるで戦時中の隣組で相互監視の危うい匂いがする。

自粛を強要するだけで保障もせず責任も取らず、誰の命も守らない政権はコロナ禍のドサクサに紛れて、また政治を私物化する法案を出した。四月一六日、国家公務員定年延長法案に検察官の定年延長を含む関連法案が審議入りしている。東京高検黒川弘務検事長の定年を延長して検事総長のポストに付けるための法案だ。行政機関ではない独立性を持つ検察に政治が人事介入できることになり容認できないと追及されているが問題はそれだけに留まらないという。法務省の枢要ポストが検察庁の検事ですべて占められているというのだ。

省庁のトップは本来事務次官だが法務省では検事総長の方が高い地位にあるという。人事介入が可能になると独立性が失われた政権の意向を忖度する検察となりカジノ汚職事件や桜を見る会の追及が闇の中に消えてしまいうつた。（なかもりけいこ）

コロナ時代の天皇

コロナで大騒ぎの四月一〇日、天皇と皇后に対し、政府のコロナ対策専門家会議の尾身茂が「ご進講」を行い、天皇が「感染症拡大は人類にとって大きな試験。今後、皆がなお一層心を一つにして力を合わせ、難しい状況を乗り越えていくことを心から願っています」と述べたと報じられた。

「専門家会議ってそんなにヒマなのか？」というのが率直な感想だが、他方、天皇や宮内庁も苦心しているのかもしれない。英国のエリザベス女王は特別大サービスで演説し、何とか存在感をアピールしようとしている（チャールズが感染したのはトホホだが）。それに対し、天皇は四月一九日に予定していた「立皇嗣の礼」を延期するなど（このまま中止でいい）、見せ場がごとく失われている。

上皇は被災地などに出かけて「祈る」ことで親近感をアップさせてきたわけだが、いま天皇が病院を訪問する、なんてことは到底できない。そう考えると「ご進講」はコロナ時代に天皇のプレゼンスを維持するための試行錯誤なのだろう。ただ、このままで終わると思えない。最先端のテクノロジーを使った、数年前の天皇の退位メッセージのようなどんでもないやつを出してくる可能性がある。引き続き注意して（なかもりけいこ）

不要不急の天皇行事

うちでとっている新聞の五月一日の朝刊は、一面トップが「緊急事態 全国で延長へ」その下が、すっかり見慣れてしまったマスク姿の徳仁・雅子の写真が添えられた「コロナ 両陛下下の活動影響」という記事だった。昨年はまだ、五月一日とはそもそもなんの日であったのかということが書かれていたように思うが、今年の五月一日は、あたりまえのように天皇即位一年の記念の日となっていた。せっかくなので、ぼくは都心で開かれた小さなメーデーのデモに出かけた。

それにしても新型コロナウイルスの感染拡大状況は、「代替わり」後、いよいよ活動を本格化させようとしていた新天皇夫婦をはじめとす皇族の動きにも影響を及ぼしている。最初は即位後初の天皇誕生日の一般参賀の取りやめ。その後天皇・皇族関連の行事の中止や延期が相次いだ。2020東京五輪の延期や3・11の追悼式典、植樹祭や高校総体の中止も大きい。が、「純粹」な皇室行事である秋篠宮の「立皇嗣の礼」まで延期されたのは正直意外だったけど。

もちろん、それが「玉体」に万一のことがあってはという彼らの危機管理意識に発していることは間違いないが、それが明らかにしたのは天皇行事はおしなべて不要不急、いや単に不要なのだという事実だった。「国家の尊厳」のために無駄金を使っている場合か。（北）

反

天



ジャーナル

状況批評

思想・状況・批評

鵜飼哲

〈グリーンウォッシング〉としてのオリンピック・パラリンピックと天皇制 —— コロナウィルス状況から見えてきたもの

一年前の二〇一九年四月末は天皇の代替わり過程のさなかにあった。四月三〇日に明仁が退位、翌日徳仁の即位式が行われた。それに先立つ四月二三日、天皇と皇后は昭和天皇の墓所である東京都八王子市の武蔵陵を訪れた。そのとき何が起きたか、私が知ったのは半年以上後のことだった。

この事態を報じた東京新聞（二月八日付）の記事に付された写真のなかで、天皇夫妻が乗った車に向けて、沿道を埋め尽くした子供たちが日の丸の小旗を振っている。記事は当時の自民党幹事長代行、現在の文部科学大臣である萩生田光一のブログの引用で始まっていた。

「日の丸の小旗四千本はたちまち無くなり、沿道の小学校、幼稚園、保育園の子供たちは手作りの小旗で集まってくれました。」（四月二六日）

あたかも子供たちが自発的に歓迎準備をしたかのような言いぶりだが、通常の火曜日この日、子供たちが昼の沿道にいたのは、この行事がオリンピック・パラリンピック教育の一環として行われたためだ。八王子市教育委員会はあくまで各学校に情報を提供しただけ、校長が独自に判断して行った「教育的活動」であり、決して「動員」ではないという公式見解である。教育委員会指導主事の佐生秀之はこう述べたという。

「小学校」六年の学習指導要領には、国事行為などを取り上げ天皇への理解と敬愛の念を深めるとあるし、オリ・パラ教育で育てる五つの資質に『日本人としての自覚と誇りを持つ』があり、それを養うのに合致する。校長の判断はまったく問題ない。沿道に並び旗を振ることが問題だとする人もいるんですねとしか言いようがない。」

日本におけるオリ・パラと天皇制の分かち難いつながりを、これだけあけすけに表現した発言も珍しい。六四年大会を小学生のときに経験した筆者には、第一次安倍政権による教育基本法改悪の帰結が、このような形で露骨に具現化している様を目の当たりにした衝撃は大きかった。

二〇一六年八月の明仁による「生前退位を求めるメッセージ」以降、オリンピック・パラリンピックと天皇制の関係を考え直す機会はたびたびあった。オリンピック競技の復興がフランスの一貴族の発案によるもので、第一回大会が当時王政だったギリシャで開催されて以来、国際オリンピック委員会（IOC）は各国の王族や貴族のサロン紛いの場であり続けてきた。元皇族の息子であり明治天皇の曾孫に当たる元五輪アスリートの竹田恒和が、長年日本オリンピック委員会（JOC）の会長を務めIOCの委員としても重用されてきた背景にはこうした事情がある。東京招致決定時にブエノスアイレスのIOC総会でスピーチをした高円宮久子の役割も含め、皇室・皇族とオリンピック・パラリンピックの関係が、天皇が大会名誉総裁として開会宣言を行うという儀礼的側面に限定されない広がりを持っていることも確認した。しかし八王子の事態には、このような認識をさらに超える内容が含まれている。父の墓所に参拝する退位する天皇の歓迎という行事には、オリ・パラ教育の名目で参加を強制された子供たちに、「昭和」「平成」「令和」三代の連続性を、五輪理念と一体の「めでたいこと」として刷り込む意図を想定しなければならない。

かつて丸山真男は『歴史意識の「古層」』（一九七二）で、古代以来の日本における歴史的思考を特徴づける「執拗低音」を「つぎつぎとなりゆくいきおい」という言葉で表した。戦後のいわゆる象徴天皇制のもとでも、六四年の東京五輪は、皇太子（前天皇）の結婚（一九五九年）と明治維新百年（一九六八年）をつなぐ祝賀の政治の一環だった。二〇二〇年大会の場合、招致の段階では天皇家の代替わりはまだ日程に上っていないなかったにもかかわらず、明仁の生前退位によって徳仁の即位、元号の変更から五輪に至るスケジュールが、おのずからより緊密な時間的継起のなかにセットされることになった。そして安倍政権はここ数年、この「慶事」の連続に

改憲のための国民投票を押し込むことを画策してきた。いつわりの「復興五輪」がほんものの「改憲五輪」になる流れは、「惨事」を「祝祭」に、「追悼」を「祝賀」に、シームレスに連繫することを可能にする天皇制特有の媒介作用なしには「作為」されえない。

しかしコロナウィルスの世界的な感染拡大は、破壊的な不協和音のように、「執拗低音」の持続を断ち切り、このシナリオを崩壊させた。もっとも安倍晋三首相は、五輪の延期時期を一年後に設定した理由を問われ、「二年後といった延期となれば二〇二〇年東京大会はモメンタム（いきおい）が失われ、別の大会のようになってしまう」と懸念があった」と答弁している（三月二七日、参議院予算委員会）。そして今度はこの新たな「惨事」を梃子に、「緊急事態条項」導入による改憲の可能性を探り出している。

四月末になって森喜朗組織委員会会長は、五輪の再延期はなく来年でなければ中止と言いついており、国、都、IOCのあいだで追加予算の分担が未決であることも明らかにした。新型コロナウイルスの終息が見通せないなか、五輪中止を求める声もようやく広がりつつある。しかしたとえ中止になったとしても、明治公園から追い立てられた人々や霞ヶ丘団地から移住を強いられた人々に、五輪招致以前の生活が戻ってくることはない。

私たちはこれまで、オリンピック・パラリンピックと天皇制の関係を、否応なく切迫した政治日程に即して検討してきた。明治神宮創建一〇〇周年とも重なっていた二〇二〇年大会が「幻」となった今、いったん立ち止まって考えておかなければならないのは、近代天皇制と近代オリンピックは、このような共犯性を深めていくために不可欠なはずの、どんな共通の歴史的資格を持っているのかということではないだろうか。ここでは「グリーンウォッシング」という言葉を最初の手がかりにしたい。

組織委員会のホームページを見ると、今回の東京五輪は東日本大震災からの「復興五輪」であるばかりでなく、エコロジカルな「環境五輪」でもあると主張されている。大会中の再生可能エネルギーによる電力供給や水素エネルギーの活用、使い捨てのプラスチックを素材とした表彰台など八項目の取り組みが挙げられているが、当然のことながら原発に関する言及は一言もない。現実の復興を阻害しつつそれに復興の「イメージ」を置き換える東京五輪の本質そのものを隠蔽する、言わば「隠蔽の隠蔽」として

の「グリーンウォッシング」である。

しかし、日本で環境保護の装いによって歴史的現実を覆い隠す「作為」と言えば、すでに天皇制がその先鞭をつけてきたのではなかったか？ 四月二九日は昭和天皇の誕生日だが、彼の死後「緑の日」へと国の祭日としての名称が変更された（現在は「昭和の日」）。戦争責任・植民地支配責任がいまなお問われている裕仁の歴史の実像を覆い隠す、文字どおりの「グリーンウォッシング」が行われたわけだ。近年、明仁が原発反対だという憶測が広がったり、石牟礼道子と皇后美智子の往復書簡が話題になるなど、日本の産業構造の根本的な転換とは無縁のところで、エコロジーの「イメージ」が天皇制と親和的に「作為」される事例が（おのずから）！ 続いているが、その出発点が「緑の日」の制定にあったことは自明である。昨年の天皇代替わりの日程も、戦前は「天長節」だったこの記念日の記憶との連続性のうえに設定されたものだ。

コロナウィルスをはじめ世紀転換期以降次第に頻繁に出現するようになった未知の感染症は、開発資本主義の世界的拡張による森林破壊、気候変動、戦争等の結果、野生動物の生息域が急速に狭隘化し、従来接点のなかった人間を含む動物種が遭遇することから起きてきた現象である。劇的に明らかになったいわゆる「先進」諸国の医療体制の崩壊は同じ歴史過程のもうひとつの側面であり、動物種のあいだの「自然的距離」を破壊したばかりに、いまや人間は「社会的距離」を守らなければ生きていけなくなつたのだ。

米国の科学ジャーナリストのソニア・シャーマンが主張するように、パンデミックに対する真の応答は真のエコロジーをにおいてほかにない。「環境五輪」や「緑の天皇制」などといった「スペクタクル」にこの期に及んで惑わされては、この緊急の課題に正しく向き合うことはできない。天皇制の延命のための「イメージ」戦略もこの局面で厳しい変容を迫られるだろうが、その新たな「作為」を逐次暴露することがこれからの反天皇制運動の重要な課題となるだろう。オリンピックの「魔法」はいまや急速に解け始めている。天皇制の「魔法」からの日本の民衆の解放も、遠くないことを信じてよ。



私的読解報告

徐翠珍著『へ華僑二世徐翠珍在日』

その抵抗の軌跡から見える日本の姿』

大友深雪（『日の丸と君が代』の法制化と強制に反対する神奈川の会）

「民族」を「主体的人間」と読み替えさせてくれた徐翠珍さん」

□□大禍の四月中旬、オリンピックおことわりンク月例会直後の帰り支度中に「これ、読んでみませんか。華僑の方が書かれたものです」と天野さんから紹介され、その数日後「書評書いてみませんか」と桜井さんから誘われたのが、この本でした。以前から「奪われし民族性の奪還」「民族の誇り」「民族教育」に違和感を覚え、「在日」の方々とのつきあい方にも戸惑い続けてきたことへの「整理」を迫られたと考え、おそろおそろ読み始めたら、徐翠珍さんに予想外の親近感を覚えたのです。「まがりなりにも生きていた『憲法九条』の下で、一国籍がなんであれこの社会の主体者として一七〇数年生きてきた」という徐さんと同じ一九四七年生まれの自分が神奈川でのささやかな「抑圧に対する抵抗」を放り出して、彼女の西成での「闘い」に紛れ込んだような錯覚に囚われるほど、彼女の闘争課題・その時々スタンスに共感しながら、かつ私好みの色に花咲く各章の表紙（徐さんのスケッチ）にも愛おしさを覚えつつ、読み進めた結果が以下の「私的読解」報告になります。

徐翠珍さんの抵抗の軌跡―その私的概観の試み―

第一章「私の原点―闘いの軌跡」では、国家間の憎悪を生み、民衆を国内外に／国内外で分断してきた戦争をまたもや準備している日本、「中国籍をル―

ッに持ち、迫害を受けようが帰るところもない」日本人（五世や六世）に対する「嫌中」ヘイトが民衆の中にも根を張りそうな気配に戸惑いと脅威を感じ、選挙権すらないがアジア人としてある「もの言う権利」を行使して「憲法9条捨てさせない」と叫びたいという立ち位置が表明されています。

第二章「国籍条項」では、上海女工時代に培われた「自立」と「民族の誇り」を感性の基軸とした母と仕立て職人の父との間に神戸・加納町の中国的環境に生まれ育ち、民族学校九年間の高額な授業料を払いきれず半免費児童として味わった「貧乏つたれ」の経験は辛かったものの、その後幼稚園教諭補助をしながら短大初等教育科二部卒業までの五年間も民族差別の実感なく過ごした神戸時代をまず振り返ります。一九七〇年結婚で移った西成で初めて在日韓国・朝鮮人、中国人への民族差別を知り、中国名不使用を条件に採用された幼稚園から、その公立化・大阪市移管に伴い国籍条項による解雇通告をされ、「在日中国人保育労働者としての私の職場を返せ」の闘いの中で採用要綱の国籍条項の不当性を認めさせ一九七三年に現職復帰・在日の労働権・生存権保障の端緒作りを果たし、その後健常児と障害児が共に学び会える学童保育所「芽」を開設した西成での半生を語り、最後に「国籍条項」撤廃後も外国籍者の人権を踏みにじってきた「当然の法理」が新しい移民・外国人労働者に対して拡大解釈的に適用

されかねない心配で締めくくっています。

第三章「在日中国人―華僑の渡航史」では、侵略国日本に居住する「敵国人」としての戦中と「平和憲法」から除外された戦後に、「在日」がなめ尽くしてきた辛酸が語られます。

第四章「指紋押捺拒否」で問うたことでは、韓宗碩さんによる拒否の五年後の一九八五年、自分の在日中国人初の押捺拒否で始まった反外登法運動での在宅起訴、八六年の刑事法廷・八九年の民事法廷・八九年の「大赦拒否訴訟」を通して訴えたのは、「日本の大東亜共栄圏構想の中、異民族支配と資源・労働力強奪の有効な手段として生み出された『満州指紋』の延長上にある指紋押捺制度は、民族問題に止まらず、日本社会の秩序と安寧にとって目障り、厄介なものを管理するための鎖であり、この鎖からの解放」だったと。

私的読解のしめくくり

徐翠珍さんへの共感宣言

侵略国日本に抗して闘ってきた中国民衆と在日の『人間回復』の闘いから学び、日本にまつろわぬ日本の主体的住民として、天皇制と軍備の廃止をめざし続けます。

◎徐翠珍著『華僑二世徐翠珍在日』

―その抵抗の軌跡から見える日本の姿―

東方出版／二〇二〇／一五〇〇円＋税

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく 119

コロナ禍を通して見る自国中心主義と国際主義



四月二十九日付けAFP電が目に入った。米国のジョンス・ホプキンス大学の発表によれば、米国におけるコロナウイルス禍による死者の数は五万八千三百五十五人となり、ベトナム戦争における死者の数を超えたというものだ。米国の国立公文書館の数字に基づけば、ベトナムでの戦闘及び事故による米国兵士の死者数は五万八千二百人である。ベトナム戦争は、短く見ても一九六五年二月七日に始まった米軍による北爆（北ベトナム爆撃）から、七五年四月三〇日の解放戦線軍の南ベトナム・サイゴン解放まで、一〇年間続いた。流行が始まってわずか三カ月ほどしか経っていないコロナウイルスによる死者数が、一〇年間続いた戦争における死者の数を上回ったのだから、確かに驚くべきことではある。だが、米国での大多数の人びとの関心はここで止まるだろう。

ベトナム戦争では、米国はあの狭いインドシナ半島に最大時には五十四万人もの兵士を派兵し、北ベトナムを爆撃し、解放戦線に荷担する南ベトナムの人びとと山野の上に大量のナバーム弾を降らせたのだから、ベトナム側にも膨大な死者が出ているに違いない。だが、二一世紀に入ってから「反テロ戦争」でも、アフガニスタンやイラクにおける米国兵士の死者数の報道は克明になされても、戦場となっている現地の死者の実態にも数にもまったく関心を示さないのが、米国政府・

軍・メディアとそれに誘導される大方の米国人の在り方だった。これは「大国」では「ありふれた」光景だ。他ならぬ日本が行なった対アジア侵略戦争による、国内と外における死者の数え方を思い返してみれば、これは取りも直さず、私たちの足もとを照らし出す問題でもある。

今回私が読んだのはAFP電だから、まだしも「続き」があった。ハノイ当局の公式統計に基づいて、北ベトナム軍兵士と南ベトナム解放民族戦線ゲリラ兵の死者が二二〇万人、民間人の死者が二〇〇・三〇〇万人と推定されることが書き加えられていたからである。コロナ禍とベトナム戦争における「米国人」の死者数だけを取り上げて比較するという内向きの発想の犯罪性と限界は、こういう形で露わになる。

この三カ月間続いているコロナ禍一色報道の中にも、当然にも、同じ問題が見られる。欧米および中国のような大国の状況に偏重した報道の渦の中から、「小国」から届けられる小さなニュースに注目することで見えてくる問題を探り当てること、これが肝要である。「世界エイズ・結核・マラリア対策基金（グローバルファンド）戦略投資効果局長」國井修は、途上国では新型コロナウイルス以上の威力を持つ病原体が多く流行し、三大感染症で一日約七千人が死亡しているも、世界はそれほど真剣な取り組みをしてこなかった、主要七カ国が当事

者になるとこんな反応になるのか、と冷静に分析している（三月二十五日付け朝日新聞）。彼の考えの根底には「感染症に国境はない」と、「今後、感染症禍は、台風や地震と同じように随時やってくるもの」という確信が据えられている。新興感染症の多くは途上国で発生するが、地球全体を見れば健康格差があるのはおかしいという人道的な立場からいっても、それがグローバル化によって容易に先進国に広がることを防ぐという「功利的な」立場からいっても、先進国は途上国の感染症対策を援助すべきだ、と正当にも結論づける。

この観点からすると、最も注目すべき動きを「小国」キューバに見ることができる。キューバの医療水準の高さはよく知られているが、今回もコロナ禍に苦しみイタリア・ロンバルディ州をはじめ、医療体制が乏しい中米やカリブ海の小さな諸国に多数の医師と看護師を派遣している。生命工学分野でもキューバは七〇年代から米国やフィンランドの研究者と共同研究を重ね、インターフェロンの開発に成功し、それは Dengue 熱、B 型肝炎、エイズなどの克服に有効なことが証明されている。米国が改めて課している経済制裁のために資材不足が続く中で小国が実践する国際主義的な連帯の在り方は、「国境なき感染症」とたたかう世界に示唆するところが多い。キューバ政府の内政路線にはいくつもの疑問と批判を持つ筆者だが、いま審問にかけられているのは新自由主義的経済原理そのものだと考えれば、六〇年有余に及びキューバ革命の「試行錯誤」から学び取るべき国際的な視点の広がりと深さを否定することはできない。（事実の抽出は We are Cuba! : How a revolutionary people have survived in a post-Soviet world, Helen Yaffe, Yale University Press, 2020. から行なった）

（五月一日記）

46
天の皇子
マサヒコ

「原子力非常事態宣言」・「緊急事態宣言」下の「立皇嗣の礼」延期

「壊憲天皇制・象徴天皇教国家」批判 その11

天野恵一


四月七日、新型コロナウイルス特措法（改正新型コロナウイルス感染症対策特別措置法）に基づく「緊急事態宣言」が安倍晋三首相によって発令された。

この「特措法」による「宣言」は、「(1)国民の生命及び健康に著しく重大な被害を与えるおそれがある」「(2)全国のかつ急速なまん延により国民生活及び国民経済に甚大な影響を及ぼし、又はそのおそれがある」の二つの条件が満たされれば出せるとされている。

市中の感染者数の拡大と死者のカウントがアップしている状況が、東京オリンピック延期が決定した三月二四日以後、PCR検査をしぼって、感染者を隠し続ける（オリンピックの「完全実施」のために人命などどうでもよいの）政策を取り続けた安倍首相の、明白なコロナ活用への方針転換によって、政府―マスコミによって、日々コースアップされたし、「緊急事態宣言」を出せ、という人々の声は政権に批判的な人も大きくまきこんで組織された。

しかし、この「宣言」は首相の判断を絶対的根拠にし、人々のあらゆる人権に国家（公権力）が制限をかけることを可能にするものであるから、すぐなる危険なものであることを、私たちは忘れるわけにはいかない。

正確な感染者数は、今でも検査自体が重症にならなければ受けられないといった、とんでもない事態であり続けている事実的に示されているように、本当のところは政府や都のインチキな公表数に

外は知るすべは私たちにはないのである。権力による情報（マスコミ）統制は、この「宣言」によって、より正当化されているのだ。

今進んでいるのは、状況の絶望的悪化をつくりだした無責任政権による情報統制の強化であり、感染実態を客観的に明らかにすることすらせず、〈命がほしければ俺のいうことを聞け〉という恫喝政治である。

コロナウィルスの感染拡大をストップさせるための努力を私たち自身もしなければならぬことは当然である（大集会が中止におこまれ、場所を消毒し、マスクをして距離をとった会議すら数を少なくするのは致し方ない「自粛」である）。〈命あつての物種〉は誰でも同じだ。

ただ、まともな経済保障もなにもしないまま、ひたすら営業ストップを呼びかけ続けているこの政権への批判を忘れて、恐怖に縮み上がっているわけにはいかないのだ。

九年前の（3・11）福島原発震災直後に発せられた「原子力非常事態宣言」は、海へ空への放射能汚染がまったく止められていない今、当然にも生きている。放射能被害を隠し続けている、安倍政権もさすがにこの「宣言」を終了させるということとはできずにいるのだ（東京オリンピックまでに、被害の実態を隠しきりとおしたいというのは、この政権の野望であつたのだろうか）。

東京に発せられた宣言は、四月一六日には全国に

拡大された。「原子力非常事態宣言」と「緊急事態宣言」という、二重の危機の宣言状況下の四月一九日の、今回の天皇「代替わり」のラストの儀式「立皇嗣の礼」のオリンピックについての延期は、四月一四日の閣議で決定された。秋篠宮が次の天皇になることを内外に宣言する、支配者たちにとっては重要な儀式である。もちろん、私たちにとっては、その費用だけで四〇〇万円というまったく不要なレモニーである。私たち「反天」の実行委の有志は、延期された一九日の「立皇嗣の礼」の日の東京丸の内駅前抗議行動を、なんとか実現した。「延期でなく、もうやめてしまえ」の声が広々とした空間に飛び交った。電車などの乗り物は避け、遠方から自転車やペダルをこいで何時間もかけて参加した人、九四歳の参加者もいた。

みんなマスクをしている。遠くから取りまいている私服刑事のマスクと参加者のマスク。マスクだらけのバラバラ集会。奇妙な風景であつた。

丸の内駅前にはオリンピック憲章など無視して一年延期を決めた東京オリンピック・パラリンピックの「あと何日・何時間」というカウントダウンを告げる時刻塔が時をきざんでいた。人々の命を危機にさらした野望はストップしていない。〈放射能はアンダー・コントロールされている〉とのオリンピック招致のための安倍首相の「大ボラ」が〈コロナ・ウィルスはコントロールしている〉という愚かですぐ破綻した政治演出のスタートラインだった。オリンピックも「代替わり」天皇儀礼も、この政権の改憲のための大きな祝賀ナショナリズム政治であつた。それらは私たちにとっては、危険極まりない「不要」のかたまりである。「延期」ではない、いらぬのだ。もちろん原発も。（四月二七日）

日本経済新聞

4月1日～4月30日

【4月1日】

彬子◆故寛仁の長女が、千葉工業大の特任教授に就任。大学の地球学研究センター主席研究員を兼ね、京都市立芸術大学客員教授や、トルコの考古学研究を支援する三笠宮記念財団の総裁も務めている。

久子◆故高円宮の妻が、日本ライフル射撃協会の名譽総裁に就任。

植樹祭◆新型コロナウイルスの感染拡大を受け、5月31日に徳仁、雅子が参列し島根県大田市で行われる予定の第71回全国植樹祭について、島根県などが1年延期を検討。

宮内庁人事◆東大病院循環器内科の杉田純一が上皇侍医に、広島県地域政策局長の西野博之が皇嗣職宮務官に、管理課長の石原秀樹が京都事務所長に就任。

「令和」◆菅義偉・官房長官が記者会見で、元号「令和」が発表から1年となったのを受け「もう1年が過ぎたかとの思いだ。多くの国民から好意的に受け入れられ、ほっとしている」。元号自体について「1400年近い歴史を有し、国民の心理的一体感の支えにもなっている」。「今後とも令和が日本人の生活の中に深く根差すことを願う」。

【4月3日】
秋篠宮、紀子◆宮内庁が、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、19日の「立皇嗣の礼」の関連行事として、4月下旬から予定していた伊勢神宮や、神武天皇の陵などへの参拝を延期。2人は23日に伊勢神宮、27日に神武天皇陵、5月8日に昭和天皇陵を参拝する予定だったが、最終的に秋篠宮が延期の判断。

英女王◆英王室が、新型コロナウイルスの感染拡大に関するエリザベス女王の「国民」向け演説を5日にテレビとラジオで放送すると明らかに。

【4月5日】
「辰翰」◆私設図書館「羽田八幡宮文庫」で保管され、和歌などが記された書が、戦国時代―江戸時代初期に後奈良天皇と後陽成天皇が自ら書いた文書「辰翰」だったことが、豊橋市図書館の調査で分かった。

【4月6日】
「立皇嗣の礼」◆政府が、19日の「立皇嗣の礼」について、新型コロナウイルス特措法に基づく緊急事態宣言の発令後も予定通り実施する方針を固めた。政府高官が明らかに。

全国植樹祭◆島根県の丸山達也知事が、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、5月31日に徳仁、雅子が参列し大田市で開かれる予定だった第71回全国植樹祭を1年延期。

【4月7日】
宮内庁施設◆宮内庁京都事務所が、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、

京都御所の参観を8日から当面の間休止。京都仙洞御所、桂離宮、修学院離宮でも参観を取りやめ、参観のための事前申請の受け付けも休止。

伊勢神宮◆三重県伊勢市が、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、7月に開催を予定していた「伊勢神宮奉納全国花火大会」を中止。

【4月8日】
「信任状奉呈式」◆新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言を受け、宮内庁が、新任の駐日外国大使が持参した本国からの信任状を徳仁が受け取る9日の「信任状奉呈式」を延期。

【4月9日】
「立皇嗣の礼」◆菅義偉・官房長官が記者会見で、19日の「立皇嗣の礼」の在り方について、再検討。

【4月10日】
徳仁、雅子◆赤坂御所で、新型コロナウイルスの感染状況などについて、政府の専門家会議副座長の尾身茂・地域医療機能推進機構理事長から進講を受ける。

秋篠宮、紀子◆秋篠宮、紀子が福井市で5月16日に開かれる第31回全国「みどりの愛護」のつどいへの出席を取りやめ。つどいは出席者の規模を縮小、約50人の県内関係者だけが出席。

「立皇嗣の礼」◆菅義偉・官房長官が記者会見で、延期の方向で調整。

【4月11日】
皇宮警察官◆50代の幹部護衛官の男性が、新型コロナウイルスに感染。

靖国参拝◆超党派の議員連盟「みんなで

靖国神社に参拝する国会議員の会」(会長・尾辻秀久元参院副議長)が、東京・九段北の靖国神社の春季例大祭(21、22日)に合わせた一斉参拝を見送る。

【4月12日】
特攻隊員慰霊祭◆太平洋戦争で死亡した旧日本軍の特攻隊員らの慰霊祭が、鹿児島県南さつま市の万世特攻平和祈念館である。

【4月13日】
「春の園遊会」◆5月末に予定されていた徳仁、雅子「主催」の春の園遊会を取りやめる。

【4月14日】
徳仁◆皇居内の生物学研究所の隣にある苗代に、うるち米の二ホンマサリと、もち米のマンゲツモチの種もみをまく。

「立皇嗣の礼」◆政府が持ち回り閣議で、「立皇嗣の礼」について、当面延期すると正式決定。秋ごろを軸に検討を進める。安定的な皇位継承策に関し、政府は「立皇嗣の礼」終了後に本格検討を始める予定だったとして、菅義偉・官房長官が記者会見で「立皇嗣の礼」後に議論をスタートさせる方針を重ねて示す。

「春の叙勲」◆菅義偉・官房長官が記者会見で、春の叙勲に関し、5月に予定していた大綬章親授式と重光章伝達式を延期。新型コロナウイルス特措法に基づく緊急事態宣言の発令を踏まえた対応で、徳仁と中綬章などの受章者による面会は中止を決めたと報道。

【4月15日】
徳仁、雅子◆赤坂御所で、厚生労働省の

鈴木康裕・医務技監から新型コロナウイルスに関する進講を受ける。

【戦没者拝礼式】◆厚生労働省が、第2次大戦中に海外などで死亡した身元不明の戦没者を慰霊するため、5月に開催予定だった拝礼式を中止。新型コロナウイルスの感染拡大を受けた措置で、悪天候で取りやめとなった1967年以来、2回目の中止となり、前年は遺族約250人のほか、眞子や菅義偉・官房長官が参列したと報道。

【4月19日】
英女王◆英メディアが、エリザベス英女王が21日の94歳の誕生日に祝砲を撃たないように求めた。従来通り祝うのは「適切ではない」と感じ、特別なことをしないように指示。

【戦没者】追悼式◆「終戦」後、フィリピンの日本人収容所で死亡した旧日本兵や引き揚げの途中で命を落とした民間人ら計約6500人の遺骨が埋葬されている長崎県佐世保市江上町の釜墓地で、追悼式が開かれる。規模を縮小し、参列者を主催者関係者ら40人に絞る。

【4月20日】
天皇一家◆政府による緊急事態宣言発令を受け、天皇一家が移り住む予定の皇居・旧吹上仙洞御所の改修工事などが中断。秋篠宮邸の改修や、皇居・東御苑の三の丸尚蔵館の整備工事も止まっている。

【お言葉】◆新型コロナウイルスの感染拡大を受け、海外で英国のエリザベス女王ら王族が「国民」に向けたビデオメッセージを相次いで公表している一方、徳仁は

2月の誕生日の記者会見で「早期に収まることを願っております」と述べたが、その後、緊急事態宣言の対象地域が全国に広がり、識者から「国難の今こそ、国民に肉声を届けてほしい」との声も上がる。

英王室◆エリザベス英女王の夫で、2017年に王室の「公務」を引退したフィリップ殿下が、新型コロナウイルスに対応する医療従事者らを称賛する声明を発表。王室がツイッターなどで公開。

靖国参拝◆衛藤晟一・沖縄北方担当相が記者団に「毎年お参りしてきたが、今は遠慮する」。奉納を考えていない。

【4月21日】
英女王◆英国のエリザベス女王が、94歳の誕生日を迎えた。

靖国問題◆安倍晋三首相が、東京・九段北の靖国神社で始まった春季例大祭に合わせて「内閣総理大臣 安倍晋三」名で「眞神」と呼ばれる供物を奉納。高市早苗・総務相、加藤勝信・厚生労働相が眞神を奉納。安倍政権の閣僚や国会議員の参拝は確認されなかった。

【4月22日】
「内奏」◆安倍晋三首相が、皇居で「内奏」。

靖国参拝◆安倍晋三首相と全閣僚が、東京・九段北の靖国神社で21、22両日に開かれた春季例大祭に合わせた参拝をしたかった。日本遺族会会長の水落敏栄・自民党参院議員が参拝。記者団に「遺族会長として来た」。

【4月23日】
皇居外苑◆環境省の皇居外苑管理事務所

が、皇居外周を走るマラソンの団体利用受け付けを一時休止。

【4月24日】
元号法◆1979年の当日、「一世二元」制を定めた元号法案が衆院本会議で、賛成多数で可決され、参院に送付されたところ、72%が「今回のやり方でよかった」と回答した一方、「宗教色を排した儀式にすべきだった」との回答は12%にとどまり、「皇位継承の儀式は必要ない」は10%。

【4月26日】
皇室◆共同通信社が、郵送方式で実施した皇室に関する世論調査の結果をまとめ、5月1日で即位から1年となる徳仁に対し「親しみを感じる」と回答した人は58%で、男系男子に限るとした皇位継承を巡り、女性天皇を認めることに関し「賛成」「どちらかといえば賛成」のいずれかを選んだのは計85%に上り、母方に血筋がある女系天皇も計79%が賛成の意向を示したと報道。徳仁に期待する活動（二つまで回答）の1位は「海外訪問や外国賓客のもてなしなど国際親善」（56%）、雅子に期待する活動でもトップ（58%）で、徳仁、雅子とも「被災地のお見舞い」が2位だったほか、皇室への関心について「大いに関心がある」と「ある程度関心がある」を合計すると75%に上った一方、「あまり関心がない」が21%、「全く関心がない」は4%。前年5月から始まった徳仁の即位関連儀式の在り方について尋ねたところ、72%が「今回のやり方でよかった」と回答した一方、「宗教色を排した儀式にすべきだった」との回答は12%にとどまり、「皇位継承の儀式は必要ない」は10%。

【4月27日】
「皇居ラン」◆千代田区が、「皇居ランナー」に対し、マスク着用のほか、通行人やランナー同士の間隔を確保するよう呼び掛ける。

伊勢神宮◆伊勢市や志摩市など4市町の首長が伊勢市役所で記者会見し、各市への訪問自粛を共同でアピール。4月29日から当面の間、伊勢神宮外宮、内宮の参拝者用駐車場と、両宮の神楽殿を全て閉鎖。

【4月28日】
徳仁◆赤坂御所で、新型コロナウイルスの感染拡大が国内外の経済に与える影響について、日本経済研究センターの岩田一政・理事長から進講を受ける。徳仁は約90年前の世界大恐慌との比較に関心を持ち、雅子はアジアやアフリカの発展途上国などへの影響を懸念。

徳仁◆宮内庁が、徳仁が即位に伴い「子供の未来応援基金」とNPO法人「全国災害ボランティア支援団体ネットワーク」に、それぞれ5千万円ずつ計1億円を寄付。徳仁の「私的」なお手元金から拠出。

「令和万葉集」◆角川文化振興財団が、翌年春に刊行予定の「令和万葉集」に収録する短歌を募集しており、応募作から100首を選定、「万葉集」から選んだ100首、近現代の秀歌800首と合わせ、計千首が掲載される予定で、「令和」考案者とされる国文学者の中西進と歌人の永田和宏が監修を務める。

【4月29日】
「春の叙勲」◆政府が2020年春の叙勲受章者を発表。最高位の旭日大綬章に神原定征・前経団連会長ら6人を選び、作

家の宮本輝、北海道アイヌ協合理事長の加藤忠らに旭日小綬章を贈り、受章者は旭日章1012人、瑞宝章3169人の計4181人で、このうち女性は03年の

制度「改正」以降最多となる412人と全体の9・9%を占め、民間人は1944人で46・5%だったと報道。
【4月30日】

集合の「聖火」

3・28—29 福島行動

中止となったJビレッジ発の「聖火」リレーの福島コースは三月二十八日に郡山でゴールする予定だった。

リレーは中止になったが抗議の街頭スタンディングは行った。郡山駅頭で地元の大河原さきさん、黒田節子さん、蛇石郁子市議らが訴えるアピール。「アンダーコントロール」という国際的ペテンで原発被災者を切り捨てながら、「復興五輪」を演出して被害者らの悲劇を一大スポーツショービジネスのために利用しつつそととする意味での「完全な形」。こんなオリパラは絶対ムリ。

駅頭スタンディング後は「聖火リレーと五輪災害」トークリレー集会。鵜飼哲さんは五輪災害下の社会状況を書き連ねた『まつろわぬ者たちの祭り』（インパクト出版会）を上梓したばかり。近代五輪と「聖火」リ

レーのもつ帝国主義的側面と現在の日本を重ね合わせる。『オリンピックの終わりの始まり』（「モンス」という、予言的なタイトルの著書を昨年出版した谷口源太郎さんは、マネーファーストのIOCやJOCの在り方を批判するとともに、アスリートへの批判もわすれない。

翌日はJビレッジはじめ、原発二〇キロ圏内の警戒区域下にもかかわらず、オリパラと「聖火」リレーのために避難指示が解除されてしまった浪江町、双葉町、大熊町などのリレーコースを周るフィールドワークを行った。

緊急事態宣言のちようど一か月前の三月七日、安倍は「復興」を演出するために全線再開となった常磐線の双葉駅を訪れ上機嫌を装っていた。それから二週間余りたつてやっと五輪延期を宣言。感染拡大防止の決定的時期における安倍、小池、森ら五輪利権の政治家の五輪開催前のめりの優柔不断がコロナ禍を深刻化させたことは忘れてはなるまい。誰一人いない雪の双葉駅を思い出しな

明仁◆退位から1年を迎えた。
改元◆菅義偉・官房長官が記者会見で、5月1日で「令和」改元から1年を迎えることについて「この1年で新元号令和

から、原子力災害と新型「コロナ」災害という二つの緊急事態宣言下でどのように反対の声を広めていけるかを考えている。

（おことわりリンクⅡ大寛28号）

4・19、4・28—29 反天皇制・反安保行動

例年どおり反天連も呼びかけ団体

に加わり、へろこそ問う「安保・沖縄・天皇」4・28—29連続行動実行委員会を立ち上げた。実行委員会では、四月一九日に予定されていた「立皇祠の礼」に抗するシンポジウムも準備し、秋篠宮論と皇位継承論を巡って議論を交わす予定だったが、三月に入りコロナ騒ぎで会場は使えなくなり、四月に入ると「立皇祠の礼」延期説も浮上しシンポは中止。実行委有志による街頭での抗議行動に切替えた。当日五日前に「立皇祠の礼」の延期が閣議決定されたが、私たちは予定どおり集まり、「延期ではなく中止しろ」を訴えることとした。場所は東京駅中央口（丸の内側）前

が国民の皆さんの日常に受け入れていただいているようで、本当に良かった。

の行幸通り。広場のように広い歩道だ。

ここは、昨年一月、大嘗祭当日の抗議行動を行った皇居から一キロ圏内の場所。人通りは少ないがそれでも通行人はいちし、立ち止まって私たちの行動を見物する人たちもいた。こちらは三〇人ほどで警察はどっちゃり。かまぼこ車まで数台。どうということ？

たくさんの方々がマイクを持ってくれ、充実した一時間のトークリレーとなった。その後、全員で横断幕やプラカートを掲げ、だだっ広い歩行者道を皇居に向かって二〇〇メートルほど歩き、皇居のこんもりとした森を見ながら、実行委声明を読み上げ、シュプレヒコールで仕上げた。風を受けながらの気持ちのいい行動だった。私たちの声は皇居に届いたか？

二八日の沖縄「デー」集会は会場が使えず中止。二九日は反「昭和の日」デモ。集合場所に予定していた千秋ヶ谷区民会館も使用できず、会館前に集まった。八五人の参加者と

もに原宿駅前を通り、渋谷の街を歩いた。

少ないとはいえ原宿・渋谷を歩く人たちはいた。私たちは、なぜ新型コロナウイルス感染拡大に怯える街を、わざわざ「昭和の日」に反対してデモをやるのかを訴えた。ここでも恐ろしく警察はわんさか出ていたし、かまぼこ車もあちこちに列をなしていた。どうかしている。引きこもっている間にとんでもない社会になってしまっているのではないか、という気分は大きくなるのだった。感染も怖いがかつちも超怖い。何とか運動の継続を考えねば、だな。

(大子)

コロナに乗じたヘイトをやめろ！ 4・19緊急アクション

四月一九日、「コロナに乗じたヘイトをやめろ」4・19緊急アクション」が、新宿駅東口アルタ前広場で行われた。緊急事態宣言下、「外出自粛」(外へ出るな)の圧力が一段と強まる中であったが百余名が集まった。

集会の冒頭、主催の差別・排外主義に反対する連絡会からは、「ヘイトをやめろ」とはヘイト集団の民族差別に止まらない。すさまじい差別

や、デマ、排除、排斥がこの社会を覆い尽くしている。生活保護受給者に保障するとか、子どもが遊ぶ公園が封鎖され、屋内の集会ができない、特定の職業が差別され、「お上に従え」とばかりに、自粛が強要される状況はおかしいと、今日のデモを呼びかけたと提起。さらに、個別課題を越えてこの緊急事態下にある事における一切の差別を許さない、幅広い連携を持った行動を訴えた。連帯のアピールは、「無償化連絡会」「反天皇制運動連絡会」「茨城反貧困メーデー実行委員会」「沖縄への偏見を煽る放送を許さない市民有志」「要請するなら保障しろ」デモ実行委員会」の五者から発言がなされた。集会後は、新宿の繁華街をデモ。日曜なのに閑散とした街に怒りのシュプレヒコールが響き渡った。

差別・排外主義に反対する連絡会が結成されて一〇年が経つ。安倍政権からの七年は、「在特会」(現在は「日本第一党」)などのヘイト集団のみならず政権中枢に食い込む日本会議を軸とした差別・排外勢力の肥大化とネットウヨの蔓延である。その上で今日、有事における流言飛語・密告奨励・異端叩きという「自警団」社会が到来しつつある。力を合わせ声を上げ続けよう。

(差別・排外主義に反対する連絡会)

■藤田五郎

八天日誌

3月28日(土) ●「聖火リレー」と五輪災害」トークリレー集会(集会報告参照)

4月19日(日) ●アキシノノミヤ立皇嗣を認めないアピール行動(集会報告参照)

●コロナに乗じたヘイトをやめろ！緊急アクション(集会報告参照)

4月24日(金) ●おことわりリンクスタンディング

4月29日(水・休) ●反「昭和の日」デモ(集会報告参照)

5月1日(金) ●パンデモス2020 @日銀前メーデー

5月3日(日) ●安倍首相は「緊急事態宣言」を撤回しろ！ 改憲反対デモ

開催中 ●朝鮮人「慰安婦」の声をきく

13時〜18時(月・火・休日休館)

／WAM 女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅)／主催：同館

5月25日(月) ●オリンピック戒厳体制下の反戦運動を考える

18時〜／としま区民センター

503(JRほか池袋駅)／京極

紀子／主催：有事立法・治安弾圧を許すな！北部集会実行委員会、反安保・反自衛隊・反基地闘争を闘う東京北部実行委員会(03-39610212)

6月5日(金) ●明治公園オリンピック追いつけを許さない国賠訴訟第9回口頭弁論

11時30分開開廷／東京地方裁判所706号法廷(地下鉄霞ヶ関駅)

6月13日(土) ●練馬駐屯地デモ14時集合・15時デモ出発／徳丸第二公園(東武東上線東武練馬駅ほか)／主催：有事立法・治安弾圧を許すな！北部集会実行委員会

反安保・反自衛隊・反基地闘争を闘う東京北部実行委員会

6月28日(日) ●東峰現地行動12時〜／旧東峰共同出荷場跡(京成線東成田駅11時集合、迎えの車待機)／主催：三里塚空港に反対する連絡会(0479-78-8101)

*会場等の理由により中止・延期の可能性あり。主催者へのご確認を。

●今回のニュース作業は一部テレワークでやってみた。アクシデントもあり、苦労したけどなんとかなつた、かな。(獺)

神田川